

'99デジタルグランボヤッジ

DIGITAL GRANVOYAGE

日本のインターネット・ユーザは1,700万人を超えた。そして、来年にはテレビの地上波がデジタルになるという。テレビがデジタルになれば、電話もDVDもそこに接続することができる。つまりお茶の間にパソコンを持ち込まなくても、お茶の間にあるテレビがパソコンにもなるということだ。知らないうちに世の中はすっかりデジタルになり、我々もいつの間にかデジタルの海に泳ぎ出ているのである。

とはいえ、我々はまだその波打ち際でパシャパシャと戯れているに過ぎない。寄せては返すデジタルの波を気ままにキャッチし、情報を取り出し、個人の楽しみごとに終始しているだけで、自らのオリジナリティをもって何かを生み出しているとはいえない。がしかし、そういう時代ももう終わりだよと、このイベントは告げている。そうした波を一つ乗り越え、その先の沖合に広がる新たな創造の海で遊ぶときが来たんだよ、と。

グランボヤッジフェスティバルの '99年のテーマは『デジタルグランボヤッジ』。この春、出帆したグランシップが一年目に出会った波はデジタルだった。情報をネットワークし、アートの領域を広げ、無限の楽しみを予感させるデジタルの海のまっただ中で、大海に見え隠れする才能とセンスという名の波頭をしっかりと見極め、できることならビッグウェイブに育てたい。そんな気持ちで、この秋、『デジタルグランボヤッジ』は開催される。ナビゲーターは、藤井フミヤ氏。ついては、このかつてないデジタルな刺激にぜひ積極的にアクセスしていただきたいと思う。

デジタルの波を乗り越えよう！

PROGRAM 01

ring'99
～次世代のエレクトロニックデザイナーたちへ～

10.2.sat. ▶ 11.mon.

PROGRAM 02

藤井フミヤ・CGアート展

GRANVOYAGE
FumiyArt

10.8.fri. ▶ 11.mon.

PROGRAM 03

グランボヤッジ・スペシャル

FUMIYA FUJII
CONCERT TOUR 1999

10.3.sun.

Thank you!
SOLD OUT

「『数年の間に『藤井フミヤ』という名を音楽のフィールドだけでなくアートやエンターテインメントな方面でもよく聞くようになった。NYやパリでデジタルアートのエキジビションを開いたり、長野五輪ではカウントダウンシャツのデザインを手掛けたり。そうかと思えば、ゲームソフトを発表したり、昨年は後楽園遊園地でルナパークを全面プロデュースしたり。彼そのものがマルチメディアとなり、いろんな高さいろんな視点から楽しみのタネを時き続けている。といった具合だ。そして、そのことを当の本人が一番楽しんでいるようにも見える。そんな彼が今回の『デジタルグランボヤッジ』のナビゲーターをつとめるとあれば、期待はいやが上にも盛り上がる。そこで会場の下見がてら、グランシップを訪れた彼に『デジタル』への抱負などを聞いてみた。

「何から話しますっ」

——では、グランシップをご覧になった感

想から。

「新幹線から見ただけで、すごいね。富士山とも好対照だなんていう気がするし、で、内部もまたいい。1階からずっと見ていくと、いろんな空間が積み重なっていて、僕らの感覚で言うところの遊べるっていうのかな。曲線と直線でうまく仕切られていて、いろんな可能性が潜んでいるような気がしますね。スペース的にも、シスアムのにもよく作られていると思います」

——『デジタルグランボヤッジ』に向けてイメージも広まりました？

「頭の中にはすでに幾つかのアイデアがありますよ」

——今回はナビゲーターということですが、

れど。

「僕はタレントであり、ミュージシャンであり、まあ、アートもやったりしてますが、たとえば、音楽にもクラシックやオペラもあるけれど、僕はポップスだから、音楽と大衆を近づけるという役割を意識してる

デジタルグランボヤッジ・ナビゲーター 藤井フミヤ

インタビュー

FUMIYA FUJII Interview



いうか、デジタルデジタルしてない感じがしますけど。

「それはまったくその通りで、コンピュータにある機能を全部使っちゃうと、ポスターチェックになってしまうでしょ。僕のアートはなるべくアナログに近いデジタルというか、ハサミやノリやモノサシや絵の具の代わりに、たまたま「コンピュータを使う」という感覚なんです。それに『デジタルマスタベーション』というラインで描く作品にまだ飽きてないから、しばらくはそういう感覚で続けたいと思います」

——同じアート活動でも、長野オリンピックのときのカウントダウンTシャツのように、イベントとリンクしたアートというのは、発想の出発点みたいなものが違うたりますか。

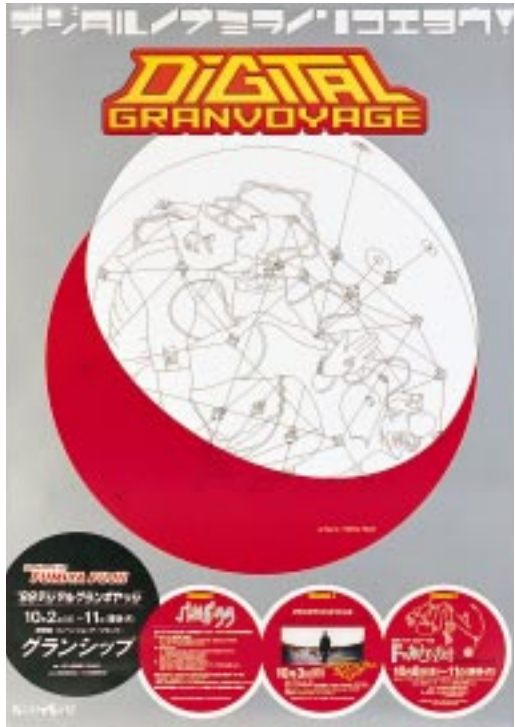
「『く一部に発信するものなら、ある意味アヴァンギャルドでも、何をやってもいいと思うけど、でもやっぱり大衆に向ける場合は、ひと目でテーマやそのものがわかるというか、たとえば横文字の英語を使うなら、中学生で習う英語で「リン」を描いたら、10人中8人はそれがリン』である」と認知できるような作品でなければな

【藤井フミヤ Fumiya Fujii】
62年、福岡県久留米市生まれ。83年、チェッカーズのボーカリストとしてデビュー。以後10年にわたり既成のアイドルの枠を越え、強い支持を受け続ける。解散後の93年、コンピュータグラフィックス展『FUMIYART～TAKE A BREAK』を開催し、全国9カ所15万人を動員。ニューヨークのソーホーやパリなど海外でも展覧会を開催するなど、精力的な創作活動が続ける。また、長野五輪のカウントダウンTシャツのデザイン、プレイステーション用ゲームソフト3Dカレイドスコープ『BABY UNIVERSE』の制作、後楽園遊園地の真夏の夜の遊園地『ルナパーク』の全面プロデュースなど、マルチに活躍。音楽の分野ではノ口活動のほか、97年には弟の藤井尚之とのバンドユニットF-BLOODを結成。今年7月、6枚目のアルバムを発表。現在、全国40カ所コンサートツアー開催中。

——ある程度の共通言語を持たなければならぬ？
「そう。そういう感覚は必要だと思うわ——ところで、今回はアートだけに、なくてライブコンサートもありますね」
「7月にリリースの新しいアルバムは思いつきでデジタルで、普通あれだけデジタル音源のCDを出したら、コンサートもデジタルかと思うでしょ？でも、それからカラオケでもいいじゃん、ってことになる。（笑）ましてや歌のうまい人になると、なおさらだね。この間、セリヌ・ディオンの「コンサートに行ったんですけど、CD聞いているのと同じじゃん」という感覚に陥ってしまった。この人、歌ってんの？って。（笑）だから、CDとは逆に生音にしたいまました」

——最後に静岡の人々にメッセージをお願いします。

「静岡といえば富士山でしょ。地図上でもまん中あたりだし、気の中心は静岡にあるという気がするんですね。そういう意味でも、グランボヤッジをきっかけにして、この静岡がいろんなアーティストにとって発想を高める場になれば、と思います」



◆デジタルグランボヤッジのポスター（写真上）とチラシも、彼が今回のために制作した新作を使い、彼自身がデザインした。



SHIZUOKA INTERMEDIA NEXT GENERATION'99



～次世代のエレクトロニックデザイナーたちへ～

10.2.sat. ▶ 11.mon.

デジタルの鼓動。

3つのコンペティションに
3人のビッグネームが顔を揃えた。

Katsuhiko Hibino
日比野克彦
Naomi Enami
江並直美

アーティスト。東京芸術大学大学院修了。82年に日本グラフィック展大賞、83年、ADC賞最高賞、JACA展グランプリを受賞。86年にシドニー・ビエンナーレ、また 95年にはヴェネチア・ビエンナーレに出品。国内外で個展・グループ展を多数開催のほか、商業デザイン、舞台美術、パフォーマンスなど、多岐に活躍。作品集に『KATSUHIKO HIBINO』『HIBINO LINE』『CD-ROM/INTERACTIVE EXHIBITION』など、著書に『ゲゲゲのピピピ』『8万文字の絵・表現することについて』などがある。現在、東京芸術大学美術学部先端芸術表現科助教。58年、岐阜県生まれ。

タイトルのSINGとは、SHIZUOKA INTERMEDIA NEXT GENERATIONのそれぞれの頭文字をとったもので、サブタイトルにあるようにまさに次世代のデジタルクリエイターに発信するコンペティションであり、ワーク

ショップである。コンペのカテゴリーは3つでデジタル表現に特化した公募展CGアート作品コンテスト、デジタルフォトコンテストと、方法、メディア、道具にとらわれず自由にグランシップを広告するアイデアを募るもの

として、この審査員兼講師の顔ぶれが凄い。江並直美、日比野克彦、中島信也。この3つの名前が揃っただけでも、「おっ！」と思わず前ノリになる人も多いと思う。単にこの名前に惹かれただけとは思わないが、コンペに先立つて行なわれたオリエンテーションには、230名を超える若きクリエイターたちが集まった。

Shinya Nakajima
中島信也

フィルムディレクター。武蔵野美術大学卒業後、東北新社に入社。現在、同社の取締役を務める。東京アートディレクターズクラブ会員。カンヌ国際CMフェスティバル、ADC賞、全日本CM協議会(ACC)賞など、多数受賞。主な作品に日清カップヌードル『hungry?』、サントリー『CCレモンシリーズ』、HONDA『STEP WGN』など。59年、福岡県生まれ。

講師の一人であり、SING'99の中核となる江並氏は、デジタルアートの現在をこう見ている。

「パーソナルコンピュータの発達は、創り手の大衆化を実現してその反面、世の中が混沌とした作品で溢れる事態を招いてしまったわけです。もちろんインターネットによってインターネットな発言活動が可能になったことは大きいし、ホームページには良いものも悪いものも何でもとにかく全部あるという点では意味はあるけれどね。なんたて素人だから、伝え方が悪かったりする。伝わるものを創るためにはある程度のもが必要なんです。技術とかアイデアとか、感性とかね。そもそもコンピュータのアプリケーションは誰かが制作したものだから、それを超えるものにはできない。面白いことをやってと思ったら、自分

アプリケーションに頼るのではなく、自分でプログラムしなくては。そう思った瞬間から宇宙は無限になる。



◆コンペティションの審査員であり、ワークショップの講師である江並直美氏。「アプリケーションに振り回された作品は、技術的に優れていても何も伝わってこないですね。SING'99が表現としてのデジタルはどこにあるのか」ということを考える機会になればいいですね」

そして、画一的な作品なんて面白くないもんねと付け加えた。ステレオタイプな作品しかできないようなら、その宇宙はまだ小さな箱の中にあるということだ。

「とにかく今回のコンペでは、ビククリさせてほしい。得体が知れなくても、どこか意表をついた作品ならオッケ。カッコいいけど中身がないね、というのはダメでしょう。今の若い人はキモチでいくから、それならはそのキモチをぶければいい。そに

でプログラムしなきゃいけないと気づく。それが実現した瞬間から宇宙は無限になるんです」

時代の風が吹く、ということじゃないですかと語る江並氏がとくに注目するのは、グランシッププロモーションのコンペ。氏はこれまで多くのコンペティションワークショップを手掛けていたが、これはかつてない試みだという。

「できあがったものを評価するのではなく、あくまでもアイデアを評価して、しかもワークショップ当日にカタチにしておうなんていうコンテストは前代未聞ですよ。我々としても、プロが3人も来てやるわけだから、なんとかしなくちゃというプレッシャーもありますし、真剣勝負になりますから、これは見モノですよ」

江並氏自身も楽しみにしているという10月2日のデジタルワークショップ。若きクリエイターたちにとっては、自分の宇宙のサイズを測るいいチャンスかもしれない。



■公募コンテスト

1.グランシッププロモーションアイデアコンテスト

オブジェ・コスチューム・パフォーマンス・ビデオ・パナー・WEB・TVCMなど、場所、方法、手段、内容を含め、幅広いアイデアによるコンテスト。企画から実施までを含めて、トータル300万円におさまることが条件。
[各賞] 最優秀グランプリ1名には、賞状・賞品(30万円相当)及びクリエイター育成事業として企画実現のための制作資金補助が得られる。
ほかにグランシップ賞(1名)、静岡新聞社・SBS静岡放送賞(1名)、江並賞(1名)、日比野賞(1名)、中島賞(1名)、特別賞(数名)を選定。
[提出形態] 制作内容がわかる企画書。

2.CGアート作品コンテスト【静止画・動画】

2D、3Dグラフィックス、アニメーション等のコンピュータグラフィックス作品。
[テーマ] 21世紀への大航海
[各賞] 最優秀グランプリ1名には、賞状と賞品(30万円相当)が贈られる。そのほか、子供の部ではグランシップ賞(1名)、静岡新聞社・SBS静岡放送賞(1名)、大人の部では江並賞(1名)、日比野賞(1名)、中島賞(1名)、特別賞(数名)を選定。
[提出形態] 静止画作品はA4紙にカラー出力したもの。動画作品はVHSビデオテープ(5分以内)で。

3.デジタルフォトコンテスト

フリーテーマで、1人5点まで。但し、デジタルカメラで撮影、または撮影したデータを加工した未発表作品に限る。
[各賞] CGアート作品コンテストに同じ。
[提出形態] A4紙にカラー出力したものにタイトルを添付。
※上記のコンテストは、いずれも年齢、プロアマ、個人団体を問わず、また、8月31日をもって、すでに応募を締め切っている。

■デジタルワークショップ

10.2.sat. am11:00スタート
グランシップ 会議ホール・風
第一部 グランシッププロモーションアイデア公開プレゼンテーション 11:00～
グランシッププロモーションアイデアコンテスト入賞者による公開プレゼンテーション。

第二部 各コンテスト授賞式 13:30～
プレゼンテーションの後、その場で最優秀グランプリを選出。CGアートコンテスト、デジタルフォトコンテストと合わせて表彰。

第三部 総評 ラウンド・テーブルトーク 14:00～
審査員各氏の感想と評価を中心にしたトークショー。「表現に重要なのは、とらわれない発想」をテーマに、コミュニケーション時代の表現とは何かを模索。

第四部 実践 作品制作ワークショップ 15:15～
グランシッププロモーションアイデアのグランプリ企画をもとに、審査員各氏のサポートを受け、実制作シミュレーションする広告制作ライブ。

夜の部 日比野塾(有料・定員制) 19:00～
日比野克彦氏を中心に、講師陣3氏と参加者が気軽に交流できる創造塾。
※「日比野塾」を除き、入場・参加は無料。但し、事前の申し込みが必要であり、申し込みの際には、コンテスト作品応募者が優先となる。

■作品展

1999.10.2.sat.～11.mon. am10:00～pm6:00
グランシップ館内各所

藤井フミヤ・CGアート展

Fumiya Art

GRANVOYAGE

10.8.fri. ▶ 11.mon.

グランシップ 交流ホール
入場料(税込) 大人/前売700円 当日800円
中・高校生/前売400円 当日500円
小学生以下/無料

イメージネーションは進化する。
コンピュータの中で、
藤井フミヤという一人のアーティストの中で。

昨年、『FUMIYART』という一冊のCG作品集が発表された。その扉には彼の言葉がこう記されている。

「なぜあなたは「コンピュータ」を使ってアートを作るのか？」

その理由は、

ひじょうに「コンピュータ」はミケランジェ

ロもタ・ウインチも

タリもピカソもウォーホルも使えな

かった道具だ。

だからあえて彼らが使えなかった「コン

ピューター」を使い

今しかできないアートを作る。

もうひとつの理由は、ディサン能力がな

い。

二つ目の理由の真偽はともかく、最初の理由が実に興味深い。「コンピュータ」を手に入れた当初は、適当にインポートしてコンピュータが勝手にやってくれることを遊んでいたと彼は言う。でも、ピカソだって、最初は鉛筆をただ動かして、そこに自然にできあがるものを楽しんでいたのではないかと気がする。手にする道具は何であれ、ピカソに言の時代があるように、あるいはミケランジェロのあの天井画があの時代の彼にしか描けなかったように、FUMIYARTは確かに今の彼にしかできないアートなのだ。

前回はアナログのドローイングを書き、コンピュータを使ってデジタルなドローイングに変える作風で『デジタルマスターベーション』を発表した。それは人間のあらゆる感情「タタ」がハードの中で入



DIGITAL MASTURBATION-Tokio



DIGITAL MASTURBATION-Chan

り乱れ、やがてビッグバンから宇宙が生まれたように微かな揺らぎから欲望が生まれ、そして「コンピュータ」は自我に目覚めてゆく。それをマスターベーションとしてとらえたものだが、今回はそれを発展させたカタチ、male & female、つまり一つのカプセルによる「love」になるはずだと語る。

作品集をひたすら眺めてみると、彼のイメージネーションがどんどん進化、あるいは成長しているのがわかる。そのことは彼自身も意識している。そして、その成長しつづけるイメージネーションが超多忙な彼を次の作品へと急ぎ立てるのだらうと思う。作品集の扉の文章は、こう結んでいる。

「あなたにとってアートとは？」

唯一「ハム」と許される狂言、狂気——

彼の作品はもう間もなく、この静岡にやってくる。グランシップのための新作も何点か用意されるといふ。たった4日間の開催だが、せつかくだからこの機会にぜひとも彼の狂言(あるいは狂気に触れる)ことをおすすめしたい。

グランボヤッジ・スペシャル

FUMIYA FUJII CONCERT TOUR 1999

~Time of the Wind~

10.3.sun. pm6:00~

グランシップ 大ホール・海
全席指定(税込) 6,000円

Thank you!
SOLD OUT



7月にリリースされた6枚目のアルバム『2000-1』では、ハードディスク「ドローイング」という最新レコーディングシステムを採用。すべての楽曲をデジタルで打ち込んだ。今の若い人には、デジタルの、いわゆるループ感がしみついていくから、そこを利用して、まるで催眠術のように若い人たちのカラダの中に入り込んでいけたら、と彼は言う。タイトルは、20世紀の集大成の意味をこめて付けられた。

「21世紀になったら、もう過去は振り返らない。来年はまだ20世紀だから、来年になら、21世紀の夢でおそらく僕のアタマは一杯だから。だから、1999年という年を自分が生きてきたポップロックを振り返る最後の年にしたいな。それをデジタルという新しい道具を使って仕上げたのが今回のアルバムです」

ところがライブでは一転「コンピュータ

アルバムとはひと味違う、
まさにライブなライブに期待！

タを入れず、生の演奏で再現するといふ。P・G・7のインタビュ参照)しかも、これまでCGを駆使したステージであったが、もはやハードがソフトに追いつかなくなつたという理由から、今回はあえてデジタルな演出ナシのツアーとなるらしい。とはいえず、そこは『デジタルグランボヤッジ』のナビゲータである。グランシップのためのアイデア、ひとひねりを盛り込んでくれるというので、ぜひ、お楽しみに。

◆7月1日リリースのニューアルバム『2000-1』。5月に発売されたシングル『風の時代』をはじめ、全11曲が収められている。「2000年になったら、2000という数字をきっとあちこちで見えるようになるから、だったら先に使っちゃえ、とこのタイトルにしました」(笑)

CLASSIC SALON

クラシック・サロン

コンサートへいらっしゃい。

& JAZZ LIVE

ジャズ・ライヴ

ちよつと素敵な”おまけ”つき。
グランシップから、
2つのコンサート・シリーズ。

音楽の楽しみ方にルールはない。楽しみたいたときに、楽しみたい人と、楽しみたいように、楽しむのがイチバンだから。コロンと横になつて、グラス片手にナッツなどをつまみ、お気に入りのCDをONにして、ときには途中で数曲とぼしたり、次々にアルバムをチェンジしたりしても、誰にも文句を言う権利はない。好きなように楽しんで

でこそ、音楽。ただし、コンサートに出掛けて、生の音楽を楽しむ場合は別だ。たまにスタンディングすることはあっても、そうそう好き勝手に振舞っていい。トイレに立つことはあるが、咳払い一つさえ気が咎める、そういう空気がある。そして、それはある意味で正しい空気でもある。

しかし、人間とは思議なもので、それでも生のコンサートに出掛けたいと思う。なぜなら、ライブにはライブならではの楽しみがあるから。その日、そのときにしか味わえない興奮、音にめぐりあえるから。そして、アーティストの今を全身で感じることもできるからに他ならない。やはりライブは最高なのだ。

が、それとは別に、もう一方ではもう少しフリーな雰囲気の中で楽しめるライブ、もっと違った趣のコンサートがあつてもいいのではないかとも思

う。たとえば、海辺のカフェでコーヒーを飲みながら、ふと流れてきた音楽に、あ、これ、いい曲ね、と心を留める。そんな気分の延長線上にあるようなコンサート。リラックスした気持ちのまま、ゆったりと豊かにしてくれるような、そんなひとときもまた、音楽の、生の、楽しみ方の一つではないだろうか。

というわけで、グランシップから2つのシリーズ企画が誕生した。一つはサロンの雰囲気の中でアーティストによる演奏とおしゃべりを宮廷菓子とともに楽しむ「クラシック・サロン」。もう一つは、日本を代表する実力派女性プレイヤーがアメリカ・ジャズ界の偉人たちをトリビュート・ドリンク付きでおくる「ジャズ・ライブ」。どちらもスウィート・ロビターの味わいとヤツトになっているところがポイントで、しかもステージは通常のコンサートホールではなく、普段レセプション・パーティの会場や会議室として使われている小スペースであることも見逃せない。

「クラシックはこつと堅苦しくて……とか、あるいは、これからジャズに親しんでいきたい」などという若葉マークの人にもおすすめの2つのシリーズ。いずれも豪華な顔ぶれで、200〜400人で楽しむには料金も手頃。さらにお菓子やドリンク付きとなれば、なるほど舌の上にも、お得な企画」といっていいだろう。

クラシック・サロン

ひとときを贅沢に盛りあげる、
お茶と宮廷菓子、そして音楽。



第1回目の「クラシック・サロン」は、去る6月6日に開かれた。場所はグランシップ6階の交流ホール。普段はエキシビションのレセプションなどに使われているスペースである。ホールに入ると、まず真っ先にテーブルの上に用意されたティーセットが目に残まり、まるで今からティー・パーティか何かが始まるかのような、そんな華やいた雰囲気思わず嬉しくなってしまう。1つのラウンドテーブルに椅子が4つ。定員180名程というから、まさにちやうとしたサロン・パーティ

の雰囲気である。あたりを見回せば、まだ開演前だというのにほぼ満席の様子。日曜の午後のコンサートとあって、母と娘らしき二人連れ、女性グループなどが目につく。さて、初回のテーマは「花の都パリで活躍した二人の作曲家」ということで、「ショパンとプーランク」の作品がフューチャーされた。折しも今年はショパン没後150年、またプーランクの生誕100年の年。二人の間には半世紀ほどの隔たりがあり、同時にパリにいたわけではないが、ともにパリで活躍し、さまざまな名曲を残している。

N響で活躍中である。ピアノにミュンヘン国際音楽コンクールピアノ部門で日本人として初めて優勝した伊藤恵、ファゴットには新日本フィルの河村幹子と、いずれも日本を代表するアーティストたちばかり。それだけの面々が顔を揃えているのだから、当然のことながら、演奏のほうは聴きこえた十分だ。一方、茂木大輔によるトークは、相変わらず軽妙洒落で、ときおりジョークを交えながらのおしゃべりに誰もが終始リラックスモード。音楽とトークの、この緩急もまた「クラシック・サロン」の魅力なのかもしれない。



●茂木大輔



●河村幹子



●木越洋



●伊藤恵

6/6
花の都パリで活躍した二人の作曲家
ショパンとプーランク
3,800円(ティー&ケーキ付・税込)
お話&オーボエ/茂木大輔 ファゴット/河村幹子
チェロ/木越洋 ピアノ/伊藤恵



●横山幸雄



●ゲーデ・トリオ

12/11
音楽とワイン～深く神秘的な関係～
4,500円(ワイン&ケーキ付・税込)
ピアノ/横山幸雄 チェロ/アンドレアス・グレーガー
ヴァイオリン/ダニエル・ゲーデ、トーマス・ゼルディッツ
※くわしくは、P23をご覧ください。



●宮原真弓



●水鳥路

'00 2/5
バレンタインコンサート
愛のメロディー
4,500円(ティー&ケーキ付・税込)
ハーブ/宮原真弓、早川りさこ、東海林悦子、小林聡美
ヴァイオリン/水鳥路

CLASSIC SALON

クラシック・サロン

Report
2

ジャズ・ライブ

夕暮れの二景にグラスを掲げ、
拍手と指笛でわきあがる一夜。



◆クラシック・サロンでは毎回、テーマにちなんだ中世の宮廷菓子を創作。演奏の合間のひととき、紅茶とともに味わうことができる。

マリー・アントワネットが、オーストリアからつれてきた菓子職人に作らせたもので、ラズベリームース、ラズベリーゼリーを重ね、生クリームとアングレーズソースでデコレーションしたラブリーなデザート。パティシェによるレシピートクも楽しく、一つのテーブルに同席した者同士で思わず会話を弾む。なごやかなお茶の時間が終わると、再び演奏が始まった。先ほどのティータイムで

まわりの人たちとおしゃべりしたせいだろうか。リラックス度はさらに増し、仲間内でコンサートを楽しんでいる、そんな空気があたりを包む。名曲が生まれた背景のタネ明かしも興味深く、その後に続く演奏になるほどと頷く人がいたり、旋律に乗せて身体を揺らす人がいたり。とりわけ滅多に聴けないファゴットのふくよかな音色には、小さな宝物を一つもった、そんな気がした。そして、終わってみると、これはコンサートというよりサロン・パーティー、イメージとしてはそちらに近いのでは、と思う。おそらく中世の貴族たちは、こんな風に極上のクラシックを聴きながら、音楽への造詣を深め、舌を肥やし、ひとときを楽しんだのに違いない。舌の上に残る甘い余韻同様、豊かさという甘い波紋が心をひたひたと満たす、ちやうと素敵な午後だった。

中世のレシピを使って、
今風のアレンジでお届けします。

パティシェ 林勝明

「中世のフランスではフルーツやジャムを使ったタルト風のものが多く、今よりも随分コクや甘さのあるお菓子が多かったようですね。私としてもそう

した宮廷菓子に関する文献をひもときながら、テーマにちやうとアレンジを加えたり、現代の味覚に合わせてたりするのは、大変興味深い仕事でもあります。クラシック・サロンでは、ケーキとお茶を味わいつつ、ぜひ、中世の宮廷サロンの優雅な雰囲気を楽しんでいただきたいと思います」

週末の午後には開かれる「クラシック・サロン」に対し、「ジャズ・ライブ」は金曜の夜のお楽しみである。その第1弾は、今や人気実力ともにトップクラスのピアニスト木住野佳子。今年度は計4回シリーズで行なわれるということだが、4人の顔をあれこれあためて

眺めてみると、日本のジャズ界にはなんて魅力的な女性たちが多いのだろうと驚く。会場は10階の会議室。というと、味気ない無機質の空間を思い浮べるかもしれないが、そういう人はぜひ、この10階に行ってみてほしい。エレベーターホールを抜けるとすぐがロビー。その右手は全面ガラス張りの窓である。そして、そこには夕暮れの静かな一景が広がっている。折しもその日、7月9日は近くの清水神社のお祭り日。背後で誰かが、もしかしたら、ここから火花が見えるかもしれないね、と囁いた。

JAZZ LIVE ジャズ・ライヴ



◆ジャズライブで飾られるヴィンテージレコードも必見。
ファン垂涎の名盤に出会える。



◆ジャズ・ライブは1ドリンク付き。ロビーでは、ホットドッグなどの軽食も用意している。通常は展望ロビーとして開放されているスペースだが、眺望も魅力の一つ。

後半は一転、クロスオーバー、フュージョン系のジャム・セッションとなった。彼女いわく、一粒で二度おいしいライブである。軽くアルコールが入った身体に心地よいナンバーが続く。鍵盤ハーモニカが奏でるジャズ、というものにも初めて触れた。一般にピアノとか、メロディオンなどと呼ばれ、小学校で習うあの楽器も、それなりの人が演奏すると、バンドネオンにも似た情趣深い豊かな音色を奏でるものだと思った。やがて最後の演奏が終わり、出演者たちはステージから消えた。にもかかわらず、しばらく会場は拍手と指笛が鳴り止まず、それが今夜のライブの成功を雄弁に物語っていた。帰り際にもう一度、ロビーから窓の外を眺めると、おそらく清水神社あたりだろう、一つ、二つ、火花が上がるのが見えた。

プロデューサーから、ひとこと。

「グランシップでは、テーマとして『心のおアシス』を掲げておりますが、この二つのシリーズはまさに『人々の心にやすらぎと潤いを届ける独自の企画』という視点から生まれました。そして、グランシップが21世紀への情報発信基地であるならば、今世紀までの芸術文化の遺産を次世代を担う若い人たちに伝える『セッション』でなければと考えます。例えばクラシック・サロンでは当時の宮廷サロンの想像し、音楽をバクにサロンで食された銘菓とお茶を再現し、オリジナリティー溢れる魅力を加味しました、お陰様でこれが評判のようです。ジャズでは、現在人気の女性プレーヤーを中心に、彼女たちがジャズに興味を抱き、心酔するきっかけ



県民に定着し、親しまれる
息の長いプログラムに。

静岡県文化財団 企画広報課
企画チーフプロデューサー
矢島敦美

になったジャズ界の巨匠たちへの熱い想いを語ってもらいます。いずれのコンサートも、他のコンサート会場と異なり、ステージと客席という分離された形態ではなく、演奏者の顔・楽器・息使いを至近距離で見られる状況作りのなかで、日ごろ体験できない新しい感動が得られるでしょう。中世のヨーロッパの雰囲気漂うクラシック・サロンと、アメリカン・テイストに溢れるジャズ・ライブと、それぞれ趣・内容は異なりますが、今年限りでなく、次年度も継続していく息の長いプログラムとして、県民の皆様定着し、親しまれるシリーズになるよう努力してまいります。どうぞ一度、会場に足を運びください、スタッフ一同心よりお待ちしております。」



11/5 ケイコ・リーとその仲間達

4,300円 (1ドリンク付・税込)

ヴォーカル/ケイコ・リー ピアノ/野力奏一
ベース/坂井紅介 ギター/吉田次郎
ドラムス/スティーブ・ソントン
※くわしくは、P22をご覧ください。



'00 1/14 大西順子トリオ

4,300円 (1ドリンク付・税込)

ピアノ/大西順子 ベース/荒巻茂生
ドラムス/原大力



7/9 木住野佳子トリオ+2

3,800円 (1ドリンク付・税込)

ピアノ/木住野佳子 ベース/古野光昭
ドラムス/市原康 ギター/塩本彰
キーボード/新沢健一郎



9/10 寺井尚子カルテット

4,300円 (1ドリンク付・税込)

ヴァイオリン/寺井尚子 ピアノ/野力奏一
ベース/坂井紅介 ドラムス/村上寛

さて、このライブにはドリンク1杯がサービスされるので、さっそくカウンターに向かう。普段は展望ロビーとして人々を楽しませているスペースが、今夜はジャズ・ラウンジに早変わり。すでにワインやビール、スコッチ・バーボンなどを楽しむ多くの人々で賑い、談笑しながら開演を待っている、といった風情だ。アルコールも手伝ってか、会場はすでにリラックスしたムード。壁面には、ジャズ界の巨匠たちのポर्टレートが飾られている。そこへ、木住野佳子が現われ、場内のボルテージは早くも最高潮となる。

前半は、スタンダード・ナンバーが中心。とはいえ、彼女の手にかかれば、古いナンバーも新しい魅力で次々と再生されてしまう。彼女が敬愛するというビル・エバンスの名曲『ワルツ・フォー・デビー』も、3拍子の原曲を5拍子のアレンジで弾くなど、彼女の瑞々しい感性に聴衆はただ圧倒されるばかりである。演奏が中休みに入ると、演奏中は降ろされていたロビーのブラインドが、再び開けられ、そこに吸い寄せられるように人々はまたロビーに群がる。先ほどの夕暮れの景色は消え、窓の向こうにはオレンジ色の灯に彩られていた街が映し出されていた。そんな風景を望みながら、一杯、二杯とグラスを傾けるのも一興である。

ところで、この「ジャズ・ライブ」にはもう一つのお楽しみが待っている。それはジャズ・ファン垂涎のヴィンテージレコードに出会えることだ。これらは内田修氏が寄贈し、岡崎市美術館が所蔵するものや、ジャズ・ファンが個人的に所有するレコードで、先ほど演奏されたビル・エバンスの名盤も並んでいる。セロニアス・モンクのレコードを懐かしそうに眺める男性を見て、ジャズと自由は手をつないでいく、というモンクの言葉をふと思い出す。まわりを見ると、同じように何やら物思いにふける人々の姿があった。



◆ジャズ・ライブ「木住野佳子トリオ+2」より。(1999.7.)

大岡信

生きている言葉。

「その人はなぜ、こつこつと詩で繋がったのか、よくわからない場合だってあるけれど、全部わかって繋いでいくなんて、連詩は生きているものだから、生体を前へ前へと送ってあげる。」

死人を解剖するようなもの。

そういうつもりでやらないとね

人間関係を詩が繋ぐ。

複数の詩人が一つの場所に集い、前の詩の意味や言葉を受けて、交代で詩をつくっていく連詩というものが日本に生まれて三十年近くになる。形式にとられない三行から五行の短い現代詩が鎖のように連なり、イメージの羽を広げていく連詩は、連句や連歌とは異なるのびやかな楽しみに満ちており、欧米の詩人の間でも近年ますます盛んであると聞く。

さて、今秋には静岡でもいよいよ『連詩の会』が開催されるが、その中心人物こそ、連詩という形を最初に試み、第一人者といわれる詩人。静岡県にも所縁深い大岡信、その人である。

——先生は以前、日本の現代詩は読者が

限られつつあり、そういう孤立した一人一人の世界から抜け出すための試みとしても、連詩は意味がある、とおっしゃっていました。

「もちろんそれが主たる目的ではないけれど、そのことに非常に関心を持っていることは確かです。言葉というものは元来、一旦口から出たなら、あるいは手の先から文字となつて出てきた瞬間から、それが日本語ならば、すべての日本人が読む可能性があるものとしてそこにある。しかし、そういう可能性があるにもかかわらず、ちっとも読まれないということもあり得て、その中の一つが現代詩だと僕は思っているんです。僕自身は、青年の頃、ほかの人の詩を読んで非常にわかる場合が多かった。ということとは、僕にとつて面白かったということですね。今考えれば、それはすごい傑作であつたわけではなくてね。何らかの意味で人の気持ちに入ってきて、いつのまにか自分の中に反響を呼んで波が起る、という作品が多かった。だから、それを失われていることに、僕の世代の人間は、何、やてんだと思うわけです。これは人間関係が希薄になったことに深く関わつていて、そういう希薄さが詩人として人に対して呼び掛ける、人に対して答えるという行動をあまりとらせなくなってきた。これは僕にはどうも好ましくない傾向でね。とにかくそういう中で連詩をやるということは、言い換えると、連詩という形によつて、少なくともその範囲内では人間同士の繋がりをつくっていくということだね。連詩は人間同士の信頼関係がなければできないから、絶対に

お互い開かれた状況で、今日初めて会った人といきなり連詩をつくるってことは、信頼関係があるということ以外にはないわけ。連詩は、一義的に言えば、詩の問題というよりも、人間関係の繋がりの問題だと僕は思っています」

——昨年、畑毛温泉での連詩に参加された佐々木幹郎さんが、連詩はスリリングでシンドイ作業だけれど、オリジナリティを蹴飛ばす痛快さがある、とお話しになっていたんですが、先生ご自身は、連詩の楽しみはどこにあると思われませんか。

「僕の場合は、連詩というのは決して苦しみではないけれど、楽しみでもなくてね。時間をキュッと圧縮して、同時に思考を膨張させる……圧縮と膨張が同時にある状態を気持ちの上でつくるわけ。日常生活にはない感覚だね。まあ、僕にとつて連詩の一番面白いところは、普段のつきあいの中では見つけられない、人の意外な一面を見ることができると、ということかもしれない。二十年来、

三十年来の友達で、しかも一緒に同人雑誌をやつてるといふ人でも、連詩をやるとへえ、コイツ、こういうところがあつたのかつてビックリすることがありますよ」

——参加されるメンバーの顔ぶれを気になさるほうですか。

「たとえば、ベルリンに芸術公社という組織があつて、また連詩をやりたいと手紙を寄こして来るのね。今度はポーランドとデンマークとドイツの詩人と一緒にやつてくれて言ってくる。実際にこの十月にやるわ



◆1987年11月、西ベルリン文学館にて。谷川俊太郎氏(左から三人目)とともにベルリン芸術祭に招かれ、オスカー・バステイオール、H・C・アルトマン両氏と、連詩『ファザー・ネン通りの綿ばしこ』を制作。(撮影 / Copyright by: TILL BARTELS)

けだけれど。その場合、メンバーの誰一人僕は知らない。もちろん僕がこの人とやりたいと言つて、メンバーを選ぶ場合もありますよ。今度、静岡の『連詩の会』に参加する二人のドイツの詩人とは、昔一緒にやつたことがあつて、七、八年ぶりの再会だから非常に楽しみだね。若いドウルスグリュンヴァインは有名なゲオルクビューヒナー賞というのを三、四年前に取つちやつた。普通は六十代で取るのが当たり前のような賞なのに、それを三十代で取つたから、ドイツ

文学における一つの事件だったわけ。でも、僕は連詩をやつたときに、パツと確信した。この人は将来のドイツの詩人の世界を

担っていく人だと。出会い頭にぶつかつてわかるわけ。優秀かどうか。だから、連詩は面白いんだね」

言葉は最高のオモチャ。

——母国語の異なる人々との連詩において、翻訳者はとても重要な役割を担うと思うのですが、言葉に厳格な先生なだけに、ご自分の詩の言葉に相当する外国語の単語

がどうしても見つからない、などということはないのでしょうか。

「そんなことはないですね。日本語に合う外国語というのは、必ずあるんですよ。但し、質感も何もかもが全然違う。だから、その言葉の意味がぴったり正確だからといって、それでいいかというと、そういうわけでもなくて、むしろ僕が考えた言葉の、その言葉が言おうとしている実質をつかんで伝えるためには、直訳的な言葉ではないほうがいいと思います。そういう意味では、言葉には柔軟性があつてね。同じ言葉でも、使う人によつて意味が全然違ってくる場合もある。そこが面白い。ということとは、

連詩を印刷して、それを公表すると、その面白さは減つてしまうということでもあるのだけれど、その昔、芭蕉が連句最高の達人でしたが、彼は自分の原稿を文台から引き降ろした瞬間にそれはもう反古である。それぐらいの覚悟が必要だと言つてましたね。翻訳者については、僕は可能であれば指名します。翻訳者として優秀であり、食事のときも、酒を飲んでるときも、常に同じ水準で談笑できる人は絶対必要ですからね」

——同人詩誌『権』のグループによつて、一九七一年に初めて連詩をされてから今日に至るまで、そのスタイルに変化はありますか。「それはどんどん変わつてきています。最初は一人一人勝手な長さで勝手につけたのね。もう死んじやつたけど、歌手としては友竹正則の名で知られた詩人の友竹辰が当分の間、歌の留学のために外国に行くというので、その送別会として京都でやつたのが

【おおおかまこと】詩人。東京大学国文科時代、日野啓三、丸山一郎、稲葉三千男らと雑誌『現代文学』創刊。卒業後、読売新聞社に入社、外報部記者となる(63年退社)。54年に詩誌『権』に参加。今日までに多くの詩を発表。詩集に『記憶と現在』『春 少女に』『水府』『地上楽園の午後』『故郷の水へのメッセージ』『火の遺言』など。ほかに『紀貫之』(読売文学賞)『うたげと孤心』『岡倉天心』などの論集も多数。朝日新聞に『折々のうた』を断続的に掲載(菊池寛賞)。96年にはマケドニアのストルーガ詩祭において金冠賞を受賞。31年、静岡県三島市生まれ。



最初の連詩でした。僕はその前から連句をやっていた、そのノートを谷川俊太郎と水尾比呂志に見せたら、二人とも興味をもてね。但し、自分たちは現代詩人だから、俳句の五七五のようなきちとした形でやるのは避けたい、現代詩人らしくやりたい。それでやってみてわかったことは、長さは絞らないとダメだということ。なぜなら、十行の詩を書いちゃったら、そこには恋愛も出てくるし、死者も出てくる。季節なんて春夏秋冬すべて出てくることもあるわけで、そうなる则の詩をどこに付けていいか、わからなくなっちゃう。それで、もう少し絞ってやってみよう。『權』のグループでこれまでに連詩を何回もやったけれど、最後には一行ずつになって、但し、一行ずつではなくて、必ず現代詩でやったわけ。そのとき僕は思ったんです。こうなってしまうたら、もうダメだ。なぜなら、俳句形式や短歌形式のものに絶対負けちゃうから。俳句や短歌が一千年以上もの昔から日本の詩の書き方の基本であり続けているという意味はすごく大きい。僕は現代詩でやるなら、三行、五行ぐらいが一番よからうと思っています」

——連詩についての海外の反響はいかがですか。

「『權』のことを一生懸命調べているスイス人がいて、その人はクロッペンシュタインといって、今度も静岡で連詩を翻訳してくれませんが、彼は連詩という『權』の試みに非常に注目していたんですね。それであるとき、僕と

川崎洋がベルリンに招かれて、ドイツ人の男女と四人で連詩をやった。それが海外での最初の連詩でね。初めのうち、詩人たちはこんなくだらないもの、なんて顔をしてる。詩を書くのも、ほかの人の前では辛いから別の場所に行ったりしてね。しかし、そのうちだんだん慣れてくると面白がって、人の前で詩を書くのは緊張感があっていい、なんて言ったりして。初めは警戒心の固まりでも、終わりににはまたやりたいと言っわけ。帰る頃には涙を流す者までいる。わずか二日か三日で、そうっちゃう。だから、言葉というものがいかにほかのオモチャより面白いかってことだね。どんなオモチャをもってきても、これほど面白くはない。言葉はオモチャとしても最高である、ということですよ」

——最後に、読者の方々に連詩の楽しみ方をアドバイスしていただけますか。

「たとえば、小説や随筆を読む場合と詩を読む場合とは、人々の気持ちは大分違うだろうと思うのね。とりわけ連詩というのは、一人の人が書いた詩を次の人が受けて、そのまた次の人が受けて、続いていくから、鎖ができていくわけね。その鎖は一つ一つ違う人が繋いでいくから、前の詩と後の詩とがどういう形で繋がっているかは、ほかの人にはよくわからないわけですよ。ある人は前の詩の意味に自分の詩を付けていくが、ある人は意味ではなく言葉に反応したり、また別の人は出てくる植物や動物に呼応したり、いろんな付け方をする。実際の創作の場でさえも、なぜ、この人はこうして付けたのかとわからないこともいっぱいあるけれど、まあ、前の詩を眺めていて、ッ

と当てずっぽうに付けていくわけね。それがきっちりわかって付けてしまったら、全然つまらなくなってしまう。むしろ相手が何を考えているのか、ちよとわからないぐらゐが一番付けやすい。連詩は生きているものだから。全部わかって繋いでいくなんて、それは死体を解剖しているようなもの。生きている人間、生体をそのまま次から次へと前へ送ってあげる。そういうつもりでやらないとね。連詩というのは、それぐらゐは融通がきくものなんだね。別の言い方をすれば、ルーズであると。ルーズだけど、全体としては何か繋がっている。それは逆に幅の広い面白さを繋いでいくことになるのね。だから、連詩なんてさっぱりわからないという人がいても不思議じゃない。でも、連詩ができあがると、だいたい参加者全員による座談会を開くでしょう。あれが一番面白いね。この詩はどうやってつくったか、前の詩をどう受けたか、ということの説明してくれる。この座談会をやることによつて連詩と一体化して、ある大きなものが立ち上がるわけ。一般の人も、連詩の動き方がよくわかるはず。動き方で大事なものは後戻りは絶対にしない、ということですね。始まったら、受け継ぐ人は先へ先へと開かれている詩を書くことだけが条件であるけれども、そこには必ず変化があるわけ。しかもそれは前の作品と繋がっていて、その繋がりを追っていくば、遡ることも、先に進んでいくこともできる。だから、そういう座談会に出掛けたり、あるいは座談会の記録を読むことによって、連詩をより深く楽しむことができると思いますね」

静岡グランシップ

連詩の会

■創作／10月29日～31日

■発表&交流会／11月3日

会場：日本平ホテル(非公開)

会場：グランシップ6階交流ホール

※くわしくは、P22をご覧ください。